東日本大震災
あの日を未来につなぐ、宮城のいま。

NOW IS.

2020.10.11
Vol. 53
October,2020
ナウイズ
毎月11日発行

井ノ原快彦 in 女川

撮影地：竹浦漁港

「気持ちいい」と思える街並み
そんな復興がすごくいいですね。

NOW IS. 対談 Talk Session in 女川 ONAGAWA

こういうまちが増えたら想像以上に楽しくなる。女川を生きる人の物語。

V6のメンバーとして活躍しながら、情報番組での取材などを通じ、被災地への想いを積み重ねてきた井ノ原快彦さん。今回訪れたのは、生まれ変わった街並みがまぶしい女川町。ポジティブな変化を支えたのは人々の行動力でした。地元かまぼこ店の社長であり、震災直後からまちづくりに携わる高橋正樹社長にお話を伺いました。

つらいことすら楽しんで夢を語れる場所にしたい。

高橋正樹社長（以下高橋）―大学入学からしばらくは、関東で過ごしました。2001年に女川に戻ってきましたが、本音を言うと地元への愛着は強くなかったんです。そんな時に震災が起きました。親がいる、地元があるって当たり前じゃない。「甘え」に気づいたんです。僕はこの時の気持ちを「郷土愛に頭をぶん殴られた」と表現しています。

井ノ原快彦（以下井ノ原）―ぶん殴る。それはどういう感覚だったんですか？

高橋―朝日が昇って、壊滅したまちを見て「絶対にこれは夢だ」と一度ほっとしたんです。その後すぐ、覚めない夢だと悟って。目の前が真っ暗になり、「お前何やってるんだ」とぶん殴られるような気持ちになったんです。それからすぐ、かまぼこ約7万枚を避難所に配り始めました。

井ノ原―すぐに行動を始めたと。

高橋―動かないと頭がおかしくなりそうでした。目の前の道も、震災翌日の12日には建設会社の方が片付けて。そこを通って女川、石巻、東松島に行きました。

井ノ原―連携プレーだ。その時にかまぼこを食べた人と、その後ご縁があったりしましたか？

高橋―当時高校生だった子が「食で人の役に立つ仕事がしたい」と、入社してくれました。

井ノ原―すごい。つながってる。

高橋―やっぱり人の物語なんです。人がたくさん亡くなった土地であることは事実ですが、今生きている僕らは、女川を大事にして、次世代につながないと。被災直後の必死さが徐々に「こういうまちにしたい」に変化して、次の楽しさをどうつくろうかと考えるようになりました。

井ノ原―今日、女川のまちを歩いてみて、楽しいし、すごくいいまちだなって思いました。復旧・復興と同時に、まちづくりをするというワクワクもあったんじゃないですか？

高橋―無理にでもワクワクしようとしてました。悲しさを発信しても、このまちに来たいと思ってもらえない。震災を機にまちの皆でまとまって、訪れたくなるような復興をするしかないと。

井ノ原―今の街並みは完成した姿ですか？

高橋―2013年くらいに描いた青写真は実現しました。でも、まだこれから。例えば、この前、女川小中学校が開校したのですが、そこのブランコに乗った子どもが「海と空に飛んでいくブランコだ」って。

井ノ原―いいな～！そんなところの学校に通いたい。

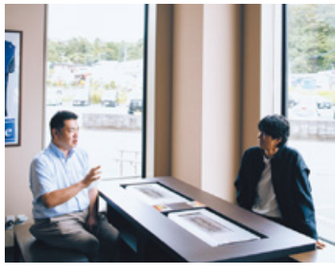
高橋―こんなにひどい目に遭ったのに、海とともに生きると言っちゃうんですよね、僕たちは。まちづくりを始めるとき、最初に変えてはいけないものを考えて、それは漁業だと結論が出ました。それ以外は何でもあり。スペインのバスク地方を景観のモデルにしたり、起業家を受け入れたり。いろんな人が同じ未来を目指せば、それが多様性になる。

井ノ原―あえて決めないんだ。まちをつくるって半端じゃない。NGなしっていいですね。

高橋―女川の人は「できない」より「どうやろう」を考える。まちづくりはこれ以上にないロマン。そのおかげで今楽しく生きてます。

井ノ原―その言葉を聞けると僕もうれしい。全部楽しんでますよね。やっぱり楽しまないと！

衣装協力：tac:tac



Inohara Yoshihiko
井ノ原快彦
いのはら よしひこ

PROFILE

1976年生まれ、東京都出身。V6のメンバーとして活躍するかたわら、ドラマ、映画、MC、情報番組のキャスターなど幅広い才能を発揮。番組での震災取材や、台風後の炊き出し支援など、被災地とも関わり続けている。愛称は「イノッチ」。

Takahashi Masaki
高橋正樹
たかはし まさき

PROFILE

株式会社高政代表取締役社長。商社勤務経験を経て地元女川にUターン、経営にまい進するさなか被災。女川町、石巻市など多くの避難所にかまぼこを配布、工場の敷地を復興に向けた拠点として提供。「楽しいことしかしたくない」が信念。

使命は女川の外と中をつなぐこと
共にまちをつくる幸せが、僕の10年。

忘れること、忘れないこと。未来に向けた女川の選択。

石碑の前で。左から伊藤さん、井ノ原さん、阿部さん。手に持っているのは、「女川1000年後のいのちを守る会」で制作した小学生向けの防災教材です。

悲惨な被害の象徴がまちの復興を語る。

「女川を直接訪れたことはありませんでしたが、情報番組のキャスターをやっていた時、何回も中継で見て。すごく気持ちよさそうなまちだねって、出演者のみんなで言ってたんです。本当に気持ちがいい！海がこう、まっすぐ見えて」。井ノ原さんは、女川駅前の商業施設、シーパルピア女川を歩きながら深呼吸。「これは遊びに来たくなるなぁ」。

この日最初に訪れたのは、シーパルピア女川の目の前に整備された震災遺構「旧女川交番」です。女川では、津波によって鉄筋コンクリートの建物が土台から浮き上がり、横倒しになりました。「旧女川交番」もその一つ。当時の中学生の声が契機になり、震災遺構としての保存が決まりました。「実際に見ると、なんだこれは、と思います…。こういう建物がこの辺りにたくさんあったなんて」。言葉を失う井ノ原さん。案内してくれた女川町観光協会会長の持田耕明さんは「あの津波の中でよく残ったなと思います。15ｍ以上の津波でしたから」と振り返ります。

交番の周りには、震災前から今までの様子を振り返るパネルが展示されています。「よくここまで復興したなぁ」と井ノ原さん。持田さんは頷きます。「こんなことがあったまちだから、おそろしいなという気持ちはあります。でも、まちの傍らに当時の姿のままの震災遺構があることで、こんな状況からここまで復興したという、象徴になるかなとも思うんです」。

当時の中学生が伝える逃げることの大切さ。

次に訪れたのは、竹浦という小さな漁港。その傍らの丘の上、海を見下ろす場所に「女川いのちの石碑」があります。この石碑は、当時女川第一中学校に通っていた若者たちが結成した「女川１０００年後のいのちを守る会」が建てたものです。「この石碑には「大きな地震がきたら、この石碑よりも上に逃げてください」と刻まれています。

石碑には「大きな地震がきたら、この石碑よりも上に逃げてください」と刻まれています。

石碑は、女川に21カ所ある浜の、津波最高到達地点よりも高いところに建てています。この石碑を見て、逃げることの重要性を思い出してほしいという想いで、生徒たちが提案した企画なんです」。そう話すのは、会のメンバーで、当時女川第一中学校で社会科の教師を務めていた阿部一彦さん。「震災の年の社会科の授業で津波の対策を考えようというのをやって。その時に出たアイディアの一つが石碑の建立でした。」。当時中学生だった伊藤唯さんは、複雑な想いでこの授業に参加していました。「まだ学校の外ははがれきだらけで、景色が見えないようにカーテンを閉めて授業を受けていました。全員が大変な思いをしていたはずですが、それでも、この活動は続けたかった。建立にかかる

遺構の周りに生える草を見て「自然は強いなぁ。どこでも生きようとする」とつぶやく井ノ原さん。

この日訪れた高政女川本店「万石の里」は、震災前から建築が進み、震災のすぐ後に完成したそう。

観光協会の持田さんと。旧女川交番の近くには、カラフルな遊具を備えた公園が完成する予定です。

お金は、募金箱を設置させてもらって集めました。みんなで手に汗をかき、緊張しながらお願いの電話をしたんです」。井ノ原さんは「外からお金を集めるのって、本当に大変。すごいことですね」。「旧女川交番」の保存も、彼女らの働きかけで実現したという話を聞き「あの時みんなが動かなかったら、僕は今日この景色を見られなかったんだ」と感心した様子でした。

何気なく使っていた言葉の意味を考える。

最後に、先述の株式会社高政を訪れ、高橋正樹さんと対談した井ノ原さん。印象に残ったのが、高橋さんの「震災を忘れないで、という気持ちが分からないんですよ」という言葉だったそうです。「高橋さんは、『つらいことは忘れちゃえばいいじゃん、僕たちは一日でも早く楽しいまちがつくれるように頑張ってきたんです』と言っていました。僕は、震災を扱う番組の最後に、いつも『忘れないようにしましょう』って言ってきました。何気なく言っていた言葉だけど、それがどういう意味を持つことなのか、考えないといけないなと。うまく言えないけど、きっと両方必要なんだろうなって」。「旧女川交番」も「女川いのちの石碑」も、震災を忘れないための取組です。津波の猛威を未来に伝えるため、防災意識を持つために重要な役割を担っています。「今後、万が一津波が起きた時、交番や石碑があることで救われる命があるはず。そういうのは忘れちゃいけないことです。それに、震災から10年が経とうとしている今も、復興のために頑張っている人がいるっていうことも、忘れちゃいけないと思う。忘れないことが支援の動きにつながることもあります。でも、実際に来てみると、みんな明るくて、普通に旅行に来たくなるようなまちになりつつある。そういう楽しさは、つらいことを飲み込んで、忘れようとしたからこそ生まれたことなんですよね」。井ノ原さんは、女川の風景を眺めながら、穏やかな笑顔でこう話しました。「テレビを通じて被災地を見ると、どうしてもドラマチックなフィルターがかかる。でも、今日聞いた話は、特別な人生の話ではなかった。こういう未来にしたいなって、普通の人たちが頑張って試行錯誤して生きている。震災の経験を抱えながら、それでも楽しく生きていこうとする姿に、救われたような気持ちになりました」。

高政のかまぼこは、魚の仕入れからすり身製造まで、女川産にこだわって作られています。

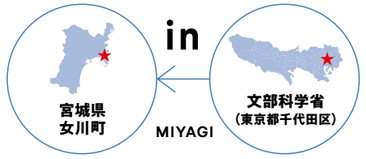
かまぼこを試食して、「おいしい！」と声を上げた井ノ原さん。おみやげを購入していました。

ここに注目！
NOW IS. EYE'S

震災遺構「旧女川交番」は周辺の整備が完了し、2020年2月に除幕式が行われました。割れた窓、ちぎれた電話線。津波で横倒しにされた当時のままの姿を、すぐ近くで見学することができます。

活躍する応援職員

SUPPORT POWER



女川町 教育委員会教育総務課 教育監

小楠（おぐす） 健太（けんた） さん

文部科学省から女川町に派遣

まち全体で子どもたちを支える、人々の気概を感じ、学ぶ日々。

「女川町に初めて来た時、まず感じたのは、まちを創造する人々のパワーでした」と話す小楠さんは、2019年4月に文部科学省から女川町に来ました。

女川町では、教育委員会教育総務課に所属し、主に児童・生徒に係る学務関係業務等を担当。さらに、今年8月23日に落成した施設一体型小中一貫教育学校の新校舎建設に関わる業務や支援を受けたカタール国との調整業務など、多岐にわたります。

新型コロナウイルス感染症の影響で、3月2日から全国の学校が一斉臨時休業となった際、女川町では教育環境のパートナーシップ協定を結んでいるNPO法人カタリバの協力も受け、小学校においてオンライン授業を導入。無線LANルーターやタブレット端末の貸出などの調整業務も行いました。「早い段階でオンライン授業を開始できたのは、『まずはやってみよう』と、素早い判断があったからです。そして、学校や教育委員会、NPO、保護者も含め皆でコロナ禍に対応していこうという協力体制が築けていました。復興していく中で培われた関係性があるからこそ、新型コロナウイルス感染症のような想定外の事態が生じても、女川町は迅速に対応できる推進力がある。これは女川町の強みだと感じました」。

「新校舎スタート直後の8月末に中学校の運動会が行われた際には、暑さ対策にと町市場の組合から大量の氷の提供があったんです。『女川の子どもたちは、女川のみんなで育てる』という気持ちをみんなが持っていて、改めて地域力の高さを心から感じました」と笑顔の小楠さん。「まずは新しい学校を軌道に乗せること。そしてICT技術の活用等も含めた新しい教育の推進など、自分の立場でできることを通して学校現場を支えていきたいです。そして文科省へ戻った後には、この町で学んだことを還元することが自分の役割だと考えています」。

町内一カ所ずつだった小中学校の施設が一体化され、8月に新校舎が落成しました。

INFORMATION from MIYAGI

〔宮城県からのお知らせ〕

01 震災復興ポスターを配布しています!

宮城県の復興の「いま」をお伝えするとともに、復興の過程で得られた新たな“価値・教訓”を全国に発信するため、今もなお復興に向けて取り組む方々の決意や想いを表したポスターを4種類作成しました。震災の記憶の風化防止や、防災・減災を目的とした掲出を行っていただける方には無料でご提供いたします。

02 「宮城県震災復興パネル」の貸出について

宮城の復興状況をまとめた「宮城県震災復興パネル」の貸出を行っています。防災等のイベントのほか、大勢の方がご覧になる場所で展示いただける場合には無料でお貸しします（送料は利用者負担）。全10枚のうち、枚数を指定した貸出も受け付けていますので、是非ご検討ください。

●仕様等
サイズ：A1、枚数：10枚、
貸出料：無料、送料：利用者負担

ポスターとパネルの詳細は
みやぎ復興情報ポータルサイト
で検索

問 県震災復興推進課
☎022-211-2408

NOW IS. 防災フロントライン BOSAI FRONT LINE

Vol.17

1 片平地区防災訓練の様子。動物も参加しました。2 仙台防災未来フォーラム2019での様子。「ペット同行避難」が原則だということを知らない人々が多くいました。3 HPでは同行避難に役立つ冊子を紹介しています。http://www.a-cube-sendai.com/

災害時のペット避難を考える

check! 01
ペット同行避難のために、しつけと備蓄品の確保を

東日本大震災では、ペットと離れ離れになったり、ペットがいるからと避難せず津波に巻き込まれたり、避難所でペットが吠え、他の避難者との間でトラブルになるなど、ペットを巡る様々な問題がありました。

エーキューブは、ペットの防災とペット同行避難の啓発に力を入れています。「環境省の『災害時におけるペットの救護対策ガイドライン』では、ペットとの『同行避難』について記載されています。普段から、迷子札やマイクロチップなど所有者を明示し、フードや水、トイレ用品など、自分のペットに合わせた避難用品を備えてください。避難先で落ち着いて過ごすためのケージトレーニングや感染症予防のための各種ワクチン、ノミ・ダニの予防も重要です。猫も首輪やリードに慣らしておきましょう」と後藤さん。齋藤さんは「散歩中などの地域の人々とのコミュニケーションも大切」と言います。避難所でペットの受け入れを拒否されても、ペットをよく知るご近所さんから「この子なら大丈夫」と受け入れてもらえたケースも震災ではありました。ペットの防災のポイントは、日常生活の延長上にあると言えます。

check! 02
ペットを守ることは人の命を守ることにつながる

避難所には、動物が苦手な人、アレルギーがある人など、様々な人々がいます。避難所を運営する人々には、要配慮者※と同じ考え方で、居住区の『住み分け』を提案しています。

「避難所にペットを受け入れてもらえず、別の避難所へ移動中に津波に巻き込まれた方もいました。ペットを守ることは、人の命を守ることにもつながります。ペットを飼っていない人も、ペットの防災について少しでも関心を持ってほしい」と二人は話してくれました。

※要配慮者とは、高齢者、障がい者、乳幼児、その他の特に配慮を必要とする人のこと。

PROFILE

特定非営利活動法人エーキューブ
理事長
後藤（ごとう） 美佐（みさ）さん（写真右）
理事
齋藤（さいとう） 文江（ふみえ）さん（写真左）

動物を介在した介在活動や介在教育、災害時の動物救援対応、災害時のペット同行避難の啓発活動や動物愛護普及啓発など、人と動物が幸せに暮らせる地域社会を構築するための活動を行う。

みやぎ復興情報ポータルサイトはコチラから!

https://www.fukkomiyagi.jp

宮城の復興情報を発信する、
「みやぎ復興情報ポータルサイト」を開設しています!
復興に関するお知らせや復興の進捗状況、
復興に向けた取組などを発信しています。

宮城県の東日本大震災死者数（関連死含む） 10,567人 | 行方不明者数 1,218人　2020年8月31日現在宮城県危機対策課調べ

Thank you from MIYAGI

宮城から、ありがとう。

全国各地、世界各国から寄せられた、たくさんの支援。
宮城の復興は、そんな数多の想いで成し遂げられています。

SUPPORT FILE
No.5

From カタール　To 女川町

MASKAR（マスカー）

宮城県の東部、牡鹿半島の基部に位置している女川町。古くから良港として栄え、サンマ漁では日本有数の水揚げ量を誇り、銀鮭や牡蠣、ホタテ、ほやなどの養殖業も盛んな水産業のまちです。東日本大震災の津波で大きな被害を受け、瓦礫（がれき）を撤去した港の更地にいち早く建設されたのが、「MASKAR」でした。

「MASKAR」は、水揚げされた水産物や加工した水産加工品を保存するための冷凍冷蔵施設です。秋のサンマ漁に間に合わせるため、2012年4月末に工事を着工し、10月15日に操業開始という驚異的なスピードで建設されました。

「『女川は必ず復興する』という強いメッセージを発信したかった」と話すのは、MASKARを運営する女川魚市場買受人協同組合の理事長、石森洋悦（いしもりようえつ）さん（以下、石森さん）です。「基幹産業である水産業の再開をアピールすることで、MASKARは復興のシンボルになりました」と石森さんは当時を振り返ります。

建設を支援してくれたのは、世界有数の天然ガス産出国であるカタールです。経済発展を遂げるきっかけとなったガス開発を、日本がかつて支援しており、支援への感謝の気持ちから、震災直後に「カタールフレンド基金」が設立され、20億円をMASKARの建設の際に支援してくれました。

「現在のMASKARは復興のシンボルとしての役割を終え、施設を活かすための様々な取組をしている段階です。魚市場から冷凍冷蔵庫、加工場、小売店までエリア全体が高度な衛生基準を満たし、まち全体で高価値の商品を生み出しています。女川の商品が世界的なブランドとなり、活気あふれるまちにできたら」。

1 MASKARの名は、カタールの伝統的な漁法に由来しています。1階は荷捌き室、2階に冷凍冷蔵施設、3階に避難場所を設け、津波が来た際は、1階部分のパネルが外れて津波を受け流し、建物を支える柱だけが残る構造になっています。 2 冷蔵室（マイナス30℃）は約6,000トンの貯蔵能力を誇ります。 3 女川魚市場買受人協同組合の理事長、石森洋悦さん。今もカタールと定期的に連絡を取るなど、信頼関係を築いています。 4 石森さんたちの想いを受け、建設を担当したのは大成建設株式会社。MASKARは、2013年度グッドデザイン賞を受賞しました。

NOW IS. Vol.53 ナウイズ

発行：2020年10月11日 宮城県震災復興本部（事務局：震災復興推進課）
〒980-8570 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号
Tel：022-211-2408　Fax：022-211-2493
『復興情報発信プロジェクト NOW IS.』は、宮城の復興の「いま」を伝えるプロジェクトです。

宮城県
Miyagi Prefectural Government